HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	カント批判哲学の前史 ： 18世紀ドイツにおけるライプニッツ受容とヒューム受容
Author(s)	増山, 浩人
Citation	研究論集, 13, 43(左)-61(左)
Issue Date	2013-12-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54062
Type	departmental bulletin paper
File Information	003_MASUYAMA.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

カント批判哲学の前史

── 18 世紀ドイツにおけるライプニッツ受容とヒューム受容 ──

増　山　浩　人

要　旨

本稿では，18 世紀ドイツにおけるライプニッツ受容とヒューム受容に関する近年の研究動向を紹介する。その上で，いくつかの具体例を交えながら，これらの研究がカント批判哲学の哲学史的源泉を解明するために寄与しうることを示したい。そのために，１．では，いわゆるヴォルフ学派に関する近年の研究動向を紹介する。1960 年以降，ヴォルフ学派に関する研究が急速に進められてきた。その原動力となったのが，Georg Olms 社によるヴォルフ全集の刊行である。この全集は，ヴォルフの著作の原典が収録された第一部，第二部と，ヴォルフ哲学の関連資料が収録された第三部からなる。第三部には，ヴォルフ以外の 18 世紀ドイツの哲学者の原典だけでなく，ヴォルフ哲学の研究書や論文集，国際ヴォルフ協会の機関誌『ヴォルフィアーナ』なども含まれている。このように，ヴォルフ全集の刊行は，ヴォルフの著作の原典をはじめとする当時の一次文献のみならず，この分野に関する研究書や論文集などの二次文献も提供することで，1960 年以降の 18 世紀ドイツ哲学史研究を牽引し続けてきたのである。２．では，1768 年にデュタン版ライプニッツ全集が出版されたことが，当時のドイツにおけるライプニッツ哲学の普及に大きく寄与したことを示す。その上で，ライプニッツとヴォルフ学派の哲学を比較検討した近年の研究を紹介する。これらの研究の中でも，M. Casula の「予定調和説とライプニッツから A. G. バウムガルテンまでの予定調和説の発展」は，ライプニッツ・ヴォルフ・バウムガルテンの三者の哲学の相違点を明らかにした重要な論文である。そこで，２．の後半部では，Casula の論文の概説を行う。最後に，３．では，18 世紀ドイツにおけるヒュームの著

* 本稿は，筆者が平成 23 年度，24 年度北海道大学大学院文学研究科リサーチアシスタントとして行った研究活動の成果の一部である。リサーチアシスタントの担当教員を勤めてくださった藏田伸雄教授，田口茂准教授には，この場を借りて感謝したい。

作の独訳の出版状況を概観する。

はじめに

伝統的な哲学史において，カントの批判哲学はしばしば「合理論と経験論の総合」の試みとして説明されてきた。もちろん，このような説明の正当性に関しては議論の余地がある。それでも，カントが当時の合理論と経験論の双方に問題を見出していたことは確かである。それゆえ，カントの批判哲学の成立背景を知るためには，カントが生きていた 18 世紀ドイツにおける合理論や経験論を研究することが不可欠である。

18 世紀ドイツにおける合理論に関する研究は，まだ発展途上の段階にある。まず，当時の合理論者の代表格であるクリスティアン・ヴォルフの哲学がそれほど注目されてこなかったのが問題である。おそらく，これは，ヴォルフの哲学はライプニッツの哲学を通俗化したものにすぎないという哲学史上の常識に由来すると思われる。この点は，「ライプニッツ•ヴォルフ学派（Leibniz-Wolffsche Schule）」という名称が流布していたことからもわかる。しかし，ライプニッツとヴォルフの哲学上の立場にはかなりの隔たりがある。さらに，ヴォルフ自身とその信奉者の哲学上の立場も必ずしも同一ではない。それゆえ，当時の合理論の内実を知るためには，当時の一次文献に依拠しながら，ライプニッツ・ヴォルフ・その信奉者という三者間の相違点を解明する必要があると思われる。

これに対し，当時の経験論に関する研究はこれまで積極的行われてきた。とりわけ，カントが強い関心を持っていたヒュームの哲学に関しては，かなり長い研究史がある。にもかかわらず，ヒュームとカントの影響関係の内実に関しては，研究者の間でいまだに共通了解が形成されていない。おそらくそれは，カントがヒュームの哲学を知った時期と方法を一義的に決定できないからだと思われる。

とはいえ，近年のヴォルフ研究と 18 世紀ドイツにおけるヒューム受容に関する研究の進歩には目を見張るものがある。そこで，本稿では，18 世紀ドイツにおける合理論と経験論に関する近年の研究動向を紹介した上で，これらの研究をカント批判哲学を研究する際にどのように生かすことができるのかを示したい。まず 1．では，近年のヴォルフ学派に関する研究動向を紹介する。次に 2．では，18 世紀のドイツにおけるライプニッツの著作の出版状況を確認した上で，ライプニッツ・ヴォルフ・バウムガルテンの三者間の相違点を論じた研究を紹介する。こうした研究は，カントによるライプニッツ哲学の受容過程を解明するために有用であると思われる。最後に，3．では，18 世紀ドイツでのヒュームの著作の独訳の出版状況を概観する。

1．ヴォルフ学派の哲学の研究動向

a．近年のヴォルフ研究の動向

本格的なヴォルフ研究が始まったのは，Georg Olms 社からヴォルフ全集が刊行され始めた 1960 年以降である。実際，1960 年以降，ヴォルフ関連の研究論文の数は急増している。この点は，G. Biller 編集の *Wolff nach Kant: Eine Bibliographie.*（2004，2009[2]）からも確認できる[1]。とりわけ，1980 年以降には，ヴォルフ関連の単著，論文集，雑誌特集号が数多く刊行され，ヴォルフ研究は盛況を見せていると言えよう。以下では，1960 年以降のヴォルフ研究の中でも，特に重要なものを紹介しよう。

まず注目すべきは，Georg Olms 社からヴォルフ全集が刊行されたことである。この全集は，第一部「ドイツ語著作（Deutsche Schriften）」，第二部「ラテン語著作（Lateinische Schriften）」，第三部「資料と記録（Materialien und Dokumente）」からなる大部の全集である。第一部と第二部の各巻には，ヴォルフの原典テキストに加え，J. École，H-W. Arndt，C. A. Corr ら全集版の編者による序文や後書きが収録されている。この序文や後書きは，著作の詳細な解説や研究論文であり，ヴォルフの著作を読む際の助けとなる。また，ヴォルフの信奉者と反対者の著作やヴォルフ関連の研究書籍が収録されている第三部「資料と記録」は，現在 130 巻を越え，なお刊行が続けられている。このように，ヴォルフ全集の刊行は，ヴォルフの原典テキストと同時代の関連する一次文献のみならず，ヴォルフ哲学の解説や研究書などの二次文献も提供することで，1960 年以降のヴォルフ研究を牽引してきたのである。

また，1980 年以降，数多くのヴォルフ関連の論文集や雑誌特集号が刊行されている。その一例としては，W. Schneiders が編者を務める *Christian Wolff, 1679–1754: Interpretationen zu seiner Philosophie und deren Wirkung, mit einer Bibliographie der Wolff-Literatur*, F. Meiner, 2. Aufl, 1986. が挙げられる。この論文集はヴォルフ哲学全般を扱っており，ヴォルフ哲学のどの分野を研究する際にも，まず参照されるべきである。また，形而上学に関して言えば，*Archives de Philosophie*（Tome65, 2002）の特集号“Wolff et la Métaphysique”や *Revue Philosophique de la France et de l' Étranger*（Tome128, 2003）のヴォルフ特集号が重要である。さらに，O-P. Rudolph と J. F. Goubet が編者を務める *Die Psychologie Christian Wolffs. Systematische und historische Untersuchungen*, M. Niemeyer, 2004 には，存在論や倫理学との関連からヴォルフの心理学を論じた論文が多数収録されている。その他にも，2005 年には，国際ヴォルフ学会の機関誌 *Wolffiana* の刊行が開始された。

以上のように，現在，ヴォルフ研究には相当の蓄積がある。ただ，こうしたヴォルフ関連の

---

[1] このビブリオグラフィーは以下の URL からダウンロード可能である。
http://www.izea.uni-halle.de/cms/fileadmin/documents/publikationen/wolff_bibliographie.pdf

資料（特に二次文献）を生かした研究は国内ではそれほど見られないと思われる。

b．バウムガルテンの形而上学と倫理学の研究動向

バウムガルテンは，感性的認識に関する学，いわゆる「美学」の創始者としてよく知られている。それゆえ，バウムガルテンに関する研究は，彼の『美学（Aesthetica）』（2Bde. 1750; 1758）に関するものが中心を占めてきた。それに比べると，彼の形而上学は，それほど注目されてこなかったと思われる。この点は，2011 年に出版された『形而上学（Metaphysica）』の批判校訂版の文献表に掲載されている研究論文の数がわずか 20 本程度であることからもうかがい知ることができる。ましてや，バウムガルテンの倫理学に関する研究は，形而上学に関する研究より少ない。

こうした研究状況の中でまず注目すべきは，アカデミー版カント全集に収録されている一連の研究資料である。まず，15 巻と 17 巻には，『形而上学』の原典テキストが，19 巻には，『第一実践哲学入門（Initia philosophiae practicae primae）』の原典テキストが収録されている。それに加え，アカデミー版には，これらの著作に対するカントのレフレクシオーンやこれらの著作を下敷きに行われたカントの講義録も収録されている。それゆえ，カント研究者が，バウムガルテンの著作を読み，これらの著作に対するカントの評価を知るための資料はほぼ出揃っていると言えよう。

とはいえ，これらの資料を使いこなすための基盤が十分に整っているとは言いがたい。もちろん，カントのレフレクシオーンや講義録の資料的価値がいまだ定まっていないことも，その一因ではある。ただそれ以上に，こうした事態は，当のバウムガルテンの著作の評価が定まっていないことに由来すると思われる。実際，バウムガルテンの『形而上学』が同時代の形而上学に関する書物の中でどのような際立った特徴を持っていたかという点を論じた研究は，M. Casula や E. Watkins，D. Mirbach による研究を除けば，ほとんど見当たらないのである。そのためか，カントのレフレクシオーンや講義録が，バウムガルテンの著作との関係が考慮されないまま，カント哲学の発展史を知るためだけに使われることが少なくない。たが，レフレクシオーンや講義録の持つ資料的な価値を十全に発揮するためには，バウムガルテンの著作の研究を進めることが不可欠だと思われる。

c．ヴォルフ学派の著作の翻訳

ヴォルフ学派の著作の翻訳はあまり多くない。管見の限りでは，国内で出版されているまとまった翻訳は，美学関連のものを除けば，ヴォルフの『ラテン語論理学』内の『哲学一般に関する予備的序説（Discursus praeliminaris de philosophia in genere）』（山本道雄訳，松家次朗訳『文化学年報』第 15 号，1996 年，一〜百六十九頁）と，バウムガルテン『形而上学』の部分訳（檜垣良成『カント理論哲学形成の研究 ──「実在性」概念を中心として ──』，渓水社，1998

年，370–399 頁）の二点のみである。ただし，近年，国外で現代語訳付きの批判校訂版や英訳のアンソロジーが何点か出版されている。これらの翻訳は，解説や注釈が充実しており，初学者がヴォルフ学派の哲学に取り組むための手引きとなりうるものである。以下では，これらの翻訳を紹介する。

批判校訂版としては，Fromman-Holzboog 社の Forschungen und Materialien zur deutschen Aufklärung の Abt.1　Text に収録されている *Christian, Wolff: Discursus praeliminaris de philosophia in genere/Einleitende Abhandlung über Philosophie im allgemeinen.*（1996）と *Alexander Gottlieb, Baumgarten: Metaphysica/Metaphysik.*（2011）が挙げられる。特に，後者は重要である。なぜなら，この批判校訂版はおそらく『形而上学』の世界初の現代語による全訳だからである。確かに，バウムガルテンの弟子，マイヤーによる独訳（1766, 1783[2], reprint. 2004）は，『形而上学』の全訳に近い性格を持っている。ただし，マイヤーは，翻訳に際して，『形而上学』の 1000 のパラグラフを 743 に減らした上で，重要なタームにかなりの意訳を施している。それゆえ，マイヤー訳は，彼の 4 巻本の『形而上学』（1755–1759）とともに，バウムガルテンの『形而上学』を読むために参考になるとはいえ，バウムガルテンの『形而上学』の厳密な翻訳とは言い難いのである。それに加え，バウムガルテンの生涯や『形而上学』の主要教説の解説，アカデミー版カント全集内の『形而上学』の原典テキストの誤植表など，カント研究者が『形而上学』を読むために助けとなる資料が多数収録されているのも，この版の魅力である[2]。さらに，2013 年 7 月には，Fugate と Hymers による『形而上学』の英訳が出版された[3]。本書には，『形而上学』全文の英訳の他，同書へのカントの書き込みやメモの英訳も収録されている。また，巻末の注では，原著初版から第 7 版までとアカデミー版カント全集版の計 8 つの版の異同を容易に確認することができる。今後，この英訳はバウムガルテンの『形而上学』を研究する者にとって必携の一冊となるだろう。

また，カント研究者が手に取りやすいアンソロジーとしては，E. Watkins, (ed.), *Kant's Critique of Pure Reason. Background Source Materials*, Cambridge University Press, 2009. が挙げられる。編者の Watkins によれば，このアンソロジーは，『純粋理性批判』の歴史的背景を知るために特に重要な同時代人のドイツ語，ラテン語，フランス語の著作の英訳を提供する初の試みである，という。実際，このアンソロジーには，ヴォルフの『ドイツ語形而上学』（1720），クヌッツェンの『作用因の体系』（1735）と『魂の非物質的本性についての哲学的論考』（1744），

---

[2] なお，この批判校訂版についての書評は『日本カント研究 13』に収録されている。鈴木崇夫「〔書評〕Alexander Gottlieb Baumgarten, Metaphysica/Metaphysik. Historisch- kritische Ausgabe. Lateinisch/Deutsch.」，『日本カント研究 13　カントと形而上学』，日本カント協会編，理想社，2012 年，235–239 頁。

[3] Fugate, C. D; Hymers, J. (trans.), *Metaphysics. A Critical Translation with Kant's Elucidations, Selected Notes, and Related Materials*, Bloomsbury, 2013.

バウムガルテンの『形而上学』(1739)，クルージウスの『理性の必然的真理について構想』(1745)，ランベルトの『真理の基準についての論考』（1761）と『新オルガノン』（1764）の部分訳，さらに，エーベルハルトやテーテンスの著作と，オイラーやヘルツの手紙の部分訳が収録されている。それに加え，このアンソロジーには，翻訳されたテキストが『純粋理性批判』のどの箇所に関連するかを確認するための訳注と対応表が収録されている。もちろん，これらの訳注や対応表の精度に関しては議論の余地がある。とはいえ，このような試みは，ヴォルフ学派の著作に近づく際の敷居を相当低くするように思われる。

2．カント研究におけるヴォルフ学派研究の応用事例 ── カントのライプニッツ批判の評価をめぐって ──

a．カントのライプニッツ批判に関する研究と 18 世紀ドイツでのライプニッツ受容

以上のように，ヴォルフ学派に関する研究は，近年かなり早いペースで進められている。とはいえ，このような研究をカント研究においてどのように活用することができるのだろうか。以下では特に，カントのライプニッツ批判というテーマに着目して，この点を考察していこう。

カントは，若い頃から，充足根拠律をはじめとするライプニッツ哲学の基本教説に一貫して批判を向け続けてきた。その足跡は，私講師就任論文『形而上学的認識の第一原理に関する新解明』（1755）や教授資格論文『可感界と可想界の形式と原理について』（1770），『純粋理性批判』（1781）の「反省概念の多義性」章などに見て取ることができる。とりわけ，「反省概念の多義性」章は，不可識別者同一の原理，モナドロジー，予定調和説，ライプニッツの空間・時間論に対する批判期のカントの立場がコンパクトにまとめられている。それゆえ，この章は，多くの研究者によって，カントによるライプニッツ批判の代表的なテキストとして様々な仕方で考察されてきた。その具体例としては，この章でのカントのライプニッツ理解が不十分であることを指摘する Parkinson の研究[4] や，ライプニッツとカントの空間･時間論の親近性を指摘した上で，カントとライプニッツの決定的な相違点をカントが認識主観を「脱-実体化（de-substantialization）」した点に見て取る，Nunziante と Vanzo の研究[5] が挙げられる。ただし，これらの研究の多くは，現在のライプニッツ研究の水準で，カントのライプニッツ批判を評価していると思われる。

とはいえ，カントが現代の研究者ほどライプニッツの哲学を適切に理解するための環境を

---

[4] Parkinson, G. H. R., Kant as a Critic of Leibniz. The Amphiboly of Concepts of Reflection, in: *Revue Internationale de Philosophie*, 35, 1981, pp. 302–314.

[5] Nunziante A. M. und Vanzo A., Representing Subjects, Mind-Dependent Objects. Kant, Leibniz and the Amphiboly, in: *British Journal for the History of Philosophy*, 17(1), 2009, pp. 133–151.

持っていたかどうかはきわめて疑わしい。その理由としては，18 世紀のドイツにおけるライプニッツの著作の出版状況が挙げられる。というのも，全 6 巻にわたるデュタン版のライプニッツ著作集が出版される 1768 年まで，ドイツでは，ライプニッツの主要著作をまとまった形で読むことができなかったからである。この点は，1717 年〜1765 年の間に多くの人に読まれていたのは，『哲学原理』（モナドロジーの羅訳），『弁神論』，『神の大義』，『理性に基づく自然と恩寵の原理』，『ライプニッツとクラークとの往復書簡』などの一部の著作のみだという Tonelli の説明からも裏付けられるだろう[6]。こうした事情を踏まえ，デュタン版をカントのライプニッツ受容の源泉の一つとみなす研究者もいる[7]。しかし，1755 年の『形而上学的認識の第一原理の新解明』において，カントは，予定調和説を，ライプニッツの名を挙げた上で批判している。となると，仮にカントがデュタン版を読んだと仮定した場合でも，1768 年以前に，カントがどのような方法で，ライプニッツの予定調和説についての知見を得たのかをよく考える必要があると思われる。

しかし，問題はそれだけではない。「ライプニッツ・ヴォルフ学派」という名称からもわかるように，ヴォルフやその信奉者達は，ライプニッツ哲学の用語や道具立てを，その意味を微妙に変更しつつ，自らの体系に取り込んでいる。それゆえ，18 世紀のドイツでは，モナドや予定調和説といったライプニッツ哲学の基本用語が，多くの哲学者によって，同名異義の概念として使われていたのである。だが，こうしたライプニッツとヴォルフ学派の哲学の微妙な差異に

---

[6] Cf. Tonelli, G., Leibniz on Innate Ideas and the Early Reactions to the Publication of the *Nouveaux Essais* (1765), in: *Journal of the History of Philosophy*, 12(4), 1974, pp. 437–454. 特に同論文の 444–445 頁では，1717 年から 1765 年にかけてのライプニッツの著作の出版状況が簡潔に解説されている。その説明の典拠として引用されているのが，Ravier, E., *Bibliographie des oeuvres de Leibniz*, F. Alcan, 1937; reprint. Georg Olms, 1966. である。このビブリオグラフィーには，1663 年から 1935 年までに出版されたライプニッツの原典や各国語訳の書誌情報，それに加えデュタン版やゲルハルト版の目次が収録されている。

[7] Vgl. Heinekamp, A., Louis Dutens und seine Ausgabe der Opera omnia von Leibniz. in: Heinekamp, A, (hrsg.), *Beiträge zur Wirkungs- und Rezeptionsgeshichte von Gottfried Wilhelm Leibniz*, Steiner Verlag, 1986, S. 1–28. 同論文の 24–25 頁で，Heinekamp は「確かに，この題名〔＝デュタン版の題名〕は Artur Warda の『イマヌエル・カントの蔵書』（ベルリン，1922 年）の目録には見出されないが，カントはこの版〔＝デュタン版〕をおそらくは使っていた。この版〔＝デュタン版〕からレッシング，ヘルダー，ゲーテ，Fr. H. ヤコービ，フリードリヒ・シュレーゲルらも，ライプニッツの知識を得ていた」（〔　〕引用者）という興味深い主張を行っている。また国内では，酒井潔がデュタン版をカントのライプニッツに関する情報源として重視している。酒井は，「『モナドロジー』から『判断力批判』へ　―ドイツ啓蒙思想における個体の形而上学」と題する論文において，デュタン版について以下のように述べている。「ところでカントが“Leibnizsche Monadologie”と名指しする場合（*KrV*. A274＝B330），彼が用いたテキストとして考えられるのは，一七六八年にジュネーヴで出版されたデュタン版 G. W. Leibniz, opera omnia, 6Bde. である。」酒井潔『ライプニッツのモナド論とその射程』，知泉書館，2013 年，101 頁。

ついては，それほど解明が進められていない。したがって，カントがライプニッツを批判する際に，ライプニッツのモナド論や予定調和説を，ヴォルフ学派のものから適切に区別できていたかどうかを評価するための地盤が整っていないのである。

以上のことから，カントのライプニッツ批判の意義と射程を適切に評価するためには，①18世紀のドイツにおけるライプニッツ著作の出版状況，②ライプニッツとヴォルフ学派の哲学の微妙な相違点，の二点を考慮する必要があると思われる。以下では，特に②を解明するために重要な研究を紹介していきたい。

b．ライプニッツ，ヴォルフ，バウムガルテンの間の距離に関する研究

ライプニッツとヴォルフの二者間の相違を論じた研究は，1960 年以降，結構な量の蓄積がある。例えば，ライプニッツとヴォルフの全般的な比較研究としては，C. A. Corr, Christian Wolff and Leibniz, in: *Journal of the History of Ideas*, 36, 1975, pp. 241–262. が挙げられる。この論文で，Corr は，①哲学のためのプログラム，②哲学の方法論と論理学，③存在論，④一般世界論，⑤心理学，⑥自然神学という六つの角度から，両者の哲学の相違点を検討している。また，W. Lenders, *Die analytische Begriffs- und Urteilstheorie von G. W. Leibniz und Chr. Wolff*, Georg Olms, 1971. は，両者の概念論と判断論についての詳細な比較研究である。その他にも，H. Poser も，ライプニッツとヴォルフのモナド概念の相違点を扱った論文を著している[8]。

また，カントのライプニッツ批判を評価しようとする場合，ライプニッツとヴォルフの哲学だけでなく，バウムガルテンの哲学の固有性も明らかにする必要がある。そのためには，テュービンゲン大学のバウムガルテン研究者 D. Mirbach の近年の研究が参考になる。とりわけ，バウムガルテンのモナド論を扱った Die Rezeption von Leibniz' Monadenlehre bei Alexander Gottlieb Baumgarten, in: Hanns-Peter, Neumann (hrsg.), *Der Monadenbegriff zwischen Spätrenaissance und Aufklärung*, De Gruyter, 2009, pp. 271–300. と，バウムガルテンの可能性概念の特色を論じた Wolffs "Complementum possibilitatis" in der Rezeption durch Alexander Gottlieb Baumgarten. in: WollfianaII–4, GWIII–104, 2008, S. 249–265. は，カントを研究する際にも重要であると思われる。また，Mirbach は，Homepage zu Alexander Gottlieb Baumgarten (http://www.baumgarten-alexander-gottlieb.de/) で，バウムガルテンに関する様々な情報を公開している。

とはいえ，当初の目的に一番有用なのは，ライプニッツ・ヴォルフ・バウムガルテンの三者の哲学の相違点を論じた M. Casula の一連の研究だと思われる。Casula によれば，バウムガルテンの哲学の特色は，ライプニッツの哲学とヴォルフの学問的方法を併せ持っている点にある，

---

[8] Poser, H., Zum Begriff der Monade bei Leibniz und Wolff, In *Akten des II. Internationalen Leibniz-Kongresses Hannover 17–22 Juli 1972*, Steiner Verlag, 1975, pp. 383–395.

という。この場合の学問的方法とは，概念の厳密な定義・確実な推論による命題の証明を柱とする数学を範にした方法のことである[9]。実際，彼らの著作は，基本的な概念の定義（ex. 可能なもの）と基本的な原理（ex. 充足根拠律）の証明から始まる。その後，これらの基本概念と原理を使用した推論によって，無数の学説が体系的に導出されるのである。その限りで，確かにバウムガルテンはヴォルフの哲学の方法を継承してはいる。けれども，哲学の内容から見れば，バウムガルテンの哲学はヴォルフよりライプニッツの哲学に近いというのが Casula の主張である。以下では，この主張を確証するために書かれた彼の二本の論文を簡単に紹介しよう。

c．M. Casula のバウムガルテン研究

まず一本目は，1975 年の Die Lehre von der prästabilierten Harmonie in ihrer Entwicklung von Leibniz bis A. G. Baumgarten; in *Akten des II. Internationalen Leibniz-Kongresses. Hannover 17–22. Juli*, 1975, Bd. 3, S. 397–415 である。この論文で，Casula は，1720 年以降のドイツにおける予定調和説の「歴史的展開（die historische Entwicklung）」を以下の五段階に区分している[10]。

第一期（1720–1724）＝ヴォルフの信奉者（Bilfinger, Thümmig）による心身問題の説明原理としての予定調和説の弁護
第二期（1724–1726）＝ヴォルフを弾劾するピエティスト（Lange, Budde）による予定調和説に対する攻撃
第三期（1726–1732）＝折衷主義者（Rüdiger, Ploucquet）による物理影響説の弁護
第四期（1732–1735）＝著名なヴォルフ主義者（Reusch, Knutzen）による物理影響説の擁護
第五期（1735–1760）＝ヴォルフの『合理的心理学』（1734）の出版以後の多様な論争

上記の哲学者の多くは，ライプニッツの予定調和説には否定的な態度をとっている。唯一の例

---

[9] ヴォルフは，『ドイツ語で出版した自分自身の著作に関する詳細な報告』において，自身の著作で用いた方法を「数学的教授法（mathematische Lehr-Art）」と呼び，その特徴として以下の三点を挙げている。1．定義されていない概念を使用しない，2．証明されていない命題を許容しない。ゆえに，こうした命題を推論における公準として使用しない，3．定義された概念と証明された命題間の序列関係を示す。Vgl. Wolff, C., *Ausführliche Nachricht von seinen eigenen Schriften, die er in deutscher Sprache heraus gegeben*, 2. Aufl, 1733, in Chistian Wolff Gesammelte Werke, 1. Abt. Bd. 9. §. 22. S. 52–54.

[10] Casula, M., Die Lehre von der prästabilierten Harmonie in ihrer Entwicklung von Leibniz bis A. G. Baumgarten; in *Akten des II. Internationalen Leibniz-Kongresses*, *Hannover, 17–22. Juli*, Steiner Verlag, 1975, Bd. 3, S. 399f.

外は，バウムガルテンとその弟子のマイヤーである。この点をふまえ，Casula は，18 世紀ドイツにおける予定調和説の「理論的展開（die theoretische Entwicklung）」を以下の三段階に区分している[11]。

① ライプニッツにおける予定調和説の「定式化（Formulierung）」
② ヴォルフによる予定調和説の「再受容（Wiederaufnahme）」
③ バウムガルテンの予定調和説の「復権（Wiederherstellung）」

これらの三段階が意味するのは以下のことである。ライプニッツは，あらゆる実体間の相互関係を説明する原理として予定調和説を提唱したが(①)，ヴォルフは予定調和説を心身問題を説明する仮説としてのみ許容した(②)。両者の立場の相違は，ヴォルフがライプニッツのモナド論を許容しなかったことに由来する。この点を受けて，ヴォルフの学問的方法を用いて，ライプニッツ的な意味でのモナド論と予定調和説を基礎付けようとしたのが，バウムガルテンである（③)。この論文では，以上の予定調和説の「理論的展開」を確証するために，モナドロジーと予定調和説に対するライプニッツ・ヴォルフ・バウムガルテンの三者の立場が詳しく記されている。以下では，特に，モナド論に関する記述を簡単に紹介しよう。

まず Casula は，ライプニッツのモナドの性格として，「質の面から見て同種的（qualitativ gleichartig）」だが，「量の面から見て段階的に異なる（quantitaiv gradweise verschieden）」という点を挙げている[12]。あらゆるモナドは，── それが動物の魂であろうと人間の魂であろうと ──，①単純実体である，②知覚を備え，同一の世界を表象するという点で，質的に同種的である。①からは，「モナドは窓がない」という性格が，②からは「モナドは宇宙の鏡である」という性格が導出される。他方で，各々のモナドは，a．自分自身の表象能力の判明性の度合い，b．世界を表象する様々なパースペクティブという二つの面から，量的に区別される。具体的には，a．によって，「裸のモナド」から神にいたるまでのモナドの階層が区別され，b．によって，同一階層の各々のモナドの差異化が行われる。その上で，Casula は，こうしたモナドの性格が，ライプニッツの予定調和説の前提をなしていると指摘する。

これに対し，Casula によれば，ヴォルフはモナド間の質的同種性を認めなかったという[13]。つまり，ライプニッツが，あらゆるモナドは「表象力（vis repraesentativa）」という共通の種類の力を備えていると主張したのに対し，ヴォルフは，魂に固有の「知覚力（vis perceptiva）」と身体や物体に固有の「運動力（vis motrix）」という二種類の力を区別したのである（Vgl. Wolff,

[11] Casula., a. a. O., S. 400.
[12] Casula., a. a. O., S. 401ff.
[13] Casula., a. a. O., S. 406ff.

Psychologia rationalis, §. 79–80)。これは，ヴォルフは魂だけに世界を表象する力を許容したと言うこともできるだろう。この点は，ヴォルフがライプニッツの「裸のモナド」に対し否定的な態度を取っていたことからもわかる。

それに加え，ヴォルフは，魂が世界を表象するという事態をライプニッツと全く異なるモデルで考えていたと Casula は主張する。つまり，ヴォルフによれば，魂は，自分の外にある物体と身体（感覚器官）が接触することで感覚を受け取り，この感覚を通じて世界の物体を表象するというのである（Vgl. Wolff, *Deutsche Metaphysik*, §. 753)。こうした説明は，モナドが，他のモナドから物理的な影響を受けずに，自発的に全世界を表現するというライプニッツ的なモナド論とは相容れない（Vgl. Leibniz, *Monadologie*, §. 62)。それゆえ，ヴォルフは「モナドには窓がない」というライプニッツの主張を否定したと言うこともできるだろう。この点について，Casula は，ヴォルフにとっては，魂は「世界へと至る窓（ein Fester zur Welt)」を持つものであり，「窓がなく，どのような外的影響からも完全に独立したモナドはもはや存在しない」と述べている[14]。

Casula によれば，ヴォルフがモナド間の質的同種性を否定したことと，ヴォルフがライプニッツの予定調和説をそのまま受け入れなかったことは密接にリンクしているという。当のライプニッツ自身が，予定調和が可能なのは，「どの実体もみな同じ宇宙の表現に他ならないからである」（Leibniz, *Monadologie*, §. 78）と述べていることを考慮すれば，この Casula の主張は正当であると思われる。こうしたヴォルフの立場に対し，ライプニッツのモナドロジーと予定調和説をヴォルフの学問的方法を使って復権させたのがバウムガルテンである，と Casula は主張する。その上で，Casula はバウムガルテンのモナド論と予定調和説の特色を簡潔にまとめている。

バウムガルテンのモナド論の特色は，ヴォルフが否定したモナドの「質の面から見て同種的」だが，「量の面から見て段階的に異なる」という性格を復権させたことである。実際，バウムガルテンは，単純実体をモナドと同一視した上で，「物体の要素（die Elemente der Körper)」，動物と人間の魂，神を全てモナドと呼んでいる（Vgl. Baumgarten, *Metaphysica*, §. 230; 421; 745; 793; 838)。バウムガルテンによれば，これらのモナドは，「自らの宇宙を表象する力（vis repraesentativa sui universi)」を備える「宇宙の生き生きとした鏡（speculum eius〔＝universi〕activum)」であり，「小宇宙（microcosmos)」であると，という（Vgl. Baumgarten, *Metaphysica*, §. 400)。他方，これらのモナドは，不可識別者同一の原理から生じるモナド間の相違に加え，自身の表象力の判明性の度合いに応じて，また，動物や人間の魂の場合は，自らの身体の位置に応じて，相互に区別されるという。以上の説明は，少なくとも言葉の上では，ライプニッツのモナド論を踏襲したものだと言えるだろう。

---

[14] Casula., a. a. O., S. 409.

さらに，Casula は，ヴォルフの否定したモナドの質的同種性を「汎通的規定の原理（das Prinzip der Omnimoda determinatio）」と「あらゆる可能なものは根拠と帰結を持つ」という「両方向から連結されたものの原理（principium utrimque connexorum）」という二つの原理によって証明しようとしたことも，バウムガルテンのモナド論の特色とみなしている[15]。まず，「汎通的規定の原理」によって，どの単純実体も，自らの「本質（essentia）」と「属性（Attributa）」と「様態（Modus）」，および他のモナドとの「関係（relatio）」に関して完全に規定された「個体（individium）」＝モナドであることが担保される。他方，「両方向から連結されたものの原理」によって，あるモナドと他のあらゆるモナド間の結合関係と，モナドの表象性格が保証される。このように，バウムガルテンは，あらゆる単純実体がモナドであり「表象力」を持つことを，ヴォルフ的な学問的方法によって導出された存在論の原理に依拠して論証したというのが，Casula の見解である。

以上の説明は，二本目の論文，A. G. Baumgarten entre G. W. Leibniz et Chr. Wolff, in: *Archives de Philosophie*, 42, 1979, pp. 547–574. でも，より詳しく行なわれている。それに加え，この二本目の論文では，充足根拠律や個体的実体の問題も詳しく論じられている。これら二本の論文は，積み残した論点や解釈が古くなっているところがあるとしても，18 世紀ドイツでのライプニッツ受容を研究する場合，依然として参照する価値があると思われる。

3．18 世紀ドイツにおけるヒューム受容の問題

以上のように，18 世紀のドイツ哲学を研究するために，ヴォルフ学派の哲学に着目することが重要なのは確かである。けれども他方で，ヴォルフが死んだ 1754 年以降，ヒュームの哲学はドイツで大きな影響力を持っていた。実際この時期の哲学者は，しばしばヒュームの哲学に言及している。こうした言及は，メンデルスゾーンの『蓋然性について』（1756）やテーテンスの『人間本性とその発展に関する哲学的試論』（1777）などに見られる。また，批判哲学の形成に際して，カントがヒュームの哲学から大きな影響を受けていたことはよく知られている。さらに，1790 年台になると，シュルツェの『エーネジデムス』（1792）のように，カントのヒュームに対する応答を吟味する試みも出てくる。こうした事情を考慮した場合，18 世紀のドイツにおけるヒューム受容を研究することは，カントの批判哲学の形成史を研究するためだけでなく，18 世紀後半のドイツの哲学史の見取り図を示すためにも，大きな手がかりになると思われる。

とはいえ，この時代に出版されているヒュームの著作の独訳はそれほど多くない。となると，英語が読めない（あるいは読まない）哲学者，特にカントがヒュームからどのような影響を受けたのかという問いに答えるためには，この時代のヒュームの著作の独訳の出版状況を明らか

[15] Casula., a. a. O., S. 410 ff.

にする必要がある。この点を知るためには，Günter, Gawlick/Lothar Kreimendahl, *Hume in der deutschen Aufklärung. Umrisse einer Rezeptionsgeschichte*, Fromman-Holzboog, 1987.（以下，『ドイツ啓蒙におけるヒューム』）が参考になる。以下では，この資料を手がかりに，この時代に出版されたヒュームの独訳の中でも，特にヒュームの理論哲学関連の著作の翻訳を紹介していこう。

a.『人間本性論』と『人間知性研究』の独訳に関して

まず，ヒュームの主著『人間本性論』の初のドイツ語全訳は，1790 年〜1792 年にかけて出版された *David Hume über die menschlichen Natur*. Aus dem Englischen nebst kritischen Versuchen zur Beurteilung dieses Werks von Ludwig Heinrich Jakob 3Bde. Halle, 1790–1792. である[16]。ハレのカント主義者である Jakob がこの大著を翻訳したのは，当時この書がカント哲学の形成の遠因とみなされていたという歴史的な関心からであった。そのためか，Jakob はこの著作の翻訳の他に，この著作に対する「批判的試論（die kritische Versuche）」を書き加え，ヒューム哲学の論駁を試みている。また，Jakob は，第一巻のヒュームの理論哲学よりも，第二巻，第三巻のヒュームの実践哲学を高く評価している。

以上のことから，『人間本性論』のドイツ語全訳は 1790 年まで出版されなかったことがわかる。それに加え，『人間本性論』のフランス語全訳は 18 世紀中には出版されなかった。となると，カントや英語を読めない同時代の哲学者は，『人間本性論』に固有のテーマ（空間•時間論，実体概念の否定，人格の同一性＝知覚の束説など）をそもそも知りえなかった可能性が高い。それゆえ，ヒュームとカントの影響関係を考察する際には，これらのテーマはあまり重要ではないと思われる。

次に，『人間知性研究』の 18 世紀ドイツでの出版状況を確認しよう[17]。この書の初のドイツ語訳は，1754 年から 1756 年にかけて出版された J. G. Sulzer 編集の 4 巻本 Herrn David Hume Vermischte Schriften の第二巻 *Philosophische Versuche über die menschliche Erkenntniß von David Hume, Ritter*. Als dessen Vermischter Schriften zweyter Theil. Nach der Zweyten vermehrten Ausgabe aus dem Englischen übersetzt und mit Anmerkungen des Herausgebers begleitet. Hamburg, Leipzig, 1755. である。（2000 年に，Reception of the Scottish Enlightment in Germany: Six Significant Translations 1755–1782 の第一巻として，この翻訳のリプリントが出版されている。）かつて，B. Erdmann や G. Tonelli のように，この翻訳の訳者は編者のズルツァーだと主

[16]『人間本性論』の Jakob 訳に関する解説は，Gawlick と Kreimendahl の『ドイツ啓蒙におけるヒューム』の 15–18 頁で行われている。以下の記述は，この箇所の解説を参考にしたものである。

[17]『人間知性研究』の独訳に関する解説は Gawlick と Kreimendahl の『ドイツ啓蒙におけるヒューム』の 20–23 頁で行われている。以下の記述は，この箇所の解説を参考にしたものである。

張する研究者もいた。しかし，それは誤解である。このことは，編者の序文の最初の文章でズルツァーが，「全くの偶然によって手に入れたこの翻訳を私が公表する気になったのには，二つの理由がある」と述べていることからも明らかである。実は現在でも，この書の翻訳者は不明なままである。また，訳文がヒュームの原典にそれほど忠実でないのも問題である。

とはいえ，この翻訳が 18 世紀後半のドイツの哲学界に与えた影響は大きい。確かに，18 世紀に出版された『人間知性研究』の独訳としては，この訳の他に，Tennemann 訳（*David Humes Untersuchung über den menschlichen Verstand*. Neu übersetzt von W. G. Tennemann nebst einer Abhandlung über den philosophischen Skepticismus von Herrn Professor Reinheld in Jena, Jena, 1793.）が挙げられる。とはいえ，この訳が出版された時期を考慮すれば，18 世紀後半に活躍したドイツの哲学者にとって，1755 年版の『人間知性研究』の独訳が，ヒュームの因果論を知るための有力な資料であった可能性は高い。実際，Arthur Warda のカントの蔵書リストからは，カントがこの翻訳を所有していたことが確認できる[18]。

b．ハーマンによるヒュームの著作の独訳

――『人間本性論』1.4.7 と『自然宗教に関する対話』――

次に，ハーマンによるヒュームの著作の独訳について触れておきたい。ハーマンは，ヒュームの著作の完全な独訳を出版したわけではない。彼が遺したのは，ヒュームの著作の部分訳，つまり，『人間本性論』第一巻「知性について」の結論部の部分訳（以下，『人間本性論』1.4.7 と略記）と『自然宗教に関する対話』の要約である。とはいえ，近年では，これらの部分訳は，ヒュームとカントの影響関係を知るための有力な資料に数えられている。

まず，『人間本性論』1.4.7 の独訳は，1771 年の 7 月 5 日と 12 日の「ケーニヒスベルク学術・政治新聞」に「懐疑論者の夜の思索」というタイトルで掲載されている[19]。（*Nachtgedanken eines Zweiflers*. Königsbergsche gelehrte und politische Zeitung. 53. Stück vom 5. Juli 1771, Beylage; 55. Stück vom 12. Juli 1771, Beylage.）しかし，ハーマン自身は，この新聞記事がヒュームの著作の翻訳であることを宣言しなかった。それゆえ，長い間，この「懐疑論者の夜の思索」は，ハーマン自身の作品であるとみなされてきた。となると，当時の哲学者はこの作品がヒュームの著作であることを知らなかった可能性もある。

しかし，ハーマンと直接交渉があったカントの場合，事情は異なると思われる。実際，近年，

---

[18] Warda の『イマヌエル・カントの蔵書』後半部には，死後カントの蔵書がオークションにかけられた時のオークションカタログが収録されている。そして，このカタログの「X．哲学と教育学」という項目の中には，この翻訳のタイトルを見つけることができる。Warda, A., *Immanuel Kants Bücher*, Verlag von Martin Breslauer, 1922, S. 50.

[19]『人間本性論』1.4.7 の独訳についての解説は，Gawlick と Kreimendahl の『ドイツ啓蒙におけるヒューム』の 42–43 頁で行われている。以下の記述はこの箇所の解説を参考にしたものである。

この部分訳を手がかりに，カントが「独断のまどろみ」から目覚めた時期と理由を考察する研究が行われている。これらの研究の代表的なものしては，M. Kuehn, Kant's Conception of "Hume's Problem" in: *Journal of the History of Philosophy*, 21, 1983, pp. 175–193. と L. Kreimendahl., *Kant: Der Durchbruch von 1769*, J. Dinter, 1990. が挙げられる[20]。両者の研究の共通点は，「独断のまどろみ」からカントを目覚めさせたのはアンチノミーの問題だったという主張にある。確かに，有名なヒューム体験の告白以外では，「独断のまどろみ（der dogmatische Schlummer）」という表現は，アンチノミー論の文脈で使用されている（ex.『プロレゴメナ』50項，1798 年 9 月 21 日ガルヴェ宛書簡）。

とはいえ，ヒュームの著作にアンチノミー論形成のきっかけになるような箇所があるのだろうか。Kuehn と Kreimendahl は，『人間本性論』1.4.7 にこのきっかけを見出す。なぜなら，この箇所で，原因と結果の連結が「心の決定」であるという教説を踏まえた上で，ヒュームは，「われわれが究極の作用原理を外的対象にその座を持つものとして探求する場合，われわれは自己矛盾に陥るか，意味のないことを語るのは明らかである」（Hume, *Treatise* 1.4.7.5）と述べているからである。このように現象の第一原理の探求した場合に自己矛盾に陥らざるを得ないという事態は，確かにカントのアンチノミーと重なるところはある。そして，『人間知性研究』では，このような問題に対してほとんど言及がない。この点から，Kuehn と Kreimendahl は，『人間本性論』1.4.7 が，カントの「独断のまどろみ」を目覚めさせる決定的なきっかけになったと主張したのである。ただし，カントが「独断のまどろみ」から覚醒した年代に関しては，両者の間で見解が異なる。また，こうしたカントの覚醒とアンチノミー論との結びつける研究に対する批判としては，山本道雄『カントとその時代　改訂増補版』晃洋書房，2010，343–359 頁が挙げられる。

次に，ハーマンによる『自然宗教に関する対話』（以下，『対話』と略記）の独訳に関して。この独訳は 1780 年頃に完成し，当時ケーニヒスベルクの知識人達によって回し読みされたと言われている[21]。とはいえ，この独訳は出版されることはなかった。18 世紀の間にドイツで出版された『対話』の独訳は，K. G. Schreiter 訳（*Gespräche über die natürliche Religion von David Hume*. Nach zwoten englischen Ausgabe. Nebst einem Gespräch über den Atheismus von Ernst Platner, Leipzig, 1781.）だけである。また，ハーマンの翻訳の完成稿は，現在では失われてしまっている。ただし，この訳の草稿は現在でも残っており，ナドラー版のハーマン全集第三巻

[20] なお，『ドイツ啓蒙におけるヒューム』，第 9 章「明白だが典拠の疑わしいカントにおけるヒューム受容」，27 項，「『人間本性論』1,4,7 による目覚め」（同書 189–198 頁）もこれらの研究に数えいれられる。

[21] 『自然宗教に関する対話』の独訳については，Gawlick と Kreimendahl の『ドイツ啓蒙におけるヒューム』の 35–38 頁で解説されている。以下の記述は，この箇所の解説を参考にしている。

に収録されている（*Dialogen die natürliche Religion betreffend von David Hume*. Übersetzt von einem fünfzig jährigen Geistlichen in Schwaben: in Johann Georg Hamann, *Sämtliche Werke*. Historisch-kritische Ausgabe von Josef Nadler. Bd. 3, Wien, 1951, S. 245–274.）。

では，カントはハーマンによるヒュームの『対話』の独訳を読んでいたのだろうか。1783 年頃のものとされる講義録『ペーリッツの哲学的宗教論』，さらには『プロレゴメナ』の「結語」で，カントは『対話』に直接言及している。とりわけ，『プロレゴメナ』の 57 節，58 節では，『対話』の「デザイン論証」批判を「有神論」に対する強力な反論と位置づけ，これに対し批判的な応答を試みている。それゆえ，少なくとも 1783 年までに，カントは何らかの『対話』の独訳を読み，そこから影響を受けていた可能性は高い。

とはいえ，Schreiter 訳も 1781 年には出版されている。その上，Arthur Warda のカントの蔵書リストから，カントは Schreiter 訳を所有していたことが確認できる[22]。となると，1781 年以後にしかカントが『対話』の独訳を読んでいなかったとすれば，カントが Schreiter 訳しか読んでいなかった可能性も残ることになる。他方で，カントが Schreiter 訳の出版される 1781 年以前に『対話』の独訳を読んでいたとすれば，それは，カントが何らかの形でハーマン訳の『対話』を読んでいた証拠になると思われる。

こうした問題を考えるのに参考になるのが，D. J. Löwisch の論文 Kants Kritik der reinen Vernunft und Humes Dialogues concerning Natural Religion, in: *Kant-Studien*, 56, 1965, S. 170–207. である。この論文の目的は，1781 年の『純粋理性批判』第一版にヒュームの『対話』の影響が見られることを証明することである。その論拠の一つとして，Löwisch は，同論文 175 ページで，ハーマンの書簡集を手がかりに，カントが 1780 年の終わり頃から 1781 年の初頭にかけて『対話』を読んでいたことの状況証拠を提示している。手短に言えば，ハーマンの書簡集からは，①1780 年 8 月 7 日には『対話』のハーマン訳が完成し，すぐ後にハーマンがこの独訳をカントに一度貸していたこと，②1780 年の 12 月にカントは再びハーマンからこの独訳を借りていて，この独訳が 1781 年の 1 月 13 日までカントの手元にあったことの二点が読み取れるのである。つまり，『純粋理性批判』の最後の仕上げを行なっていた時期に，カントはハーマン訳の『対話』を二回直接借りて読んでいた，というのが Löwisch の主張である。それに加え，Löwisch は，同論文 176 ページで，*Göttingischen Gelehrten Anzeigen* の 1779 年 11 月号の付録の『対話』の 11 ページの要約と，1780 年の *Brittische Museum für die Deutschen* に収録されている『対話』の 32 ページの要約をカントが読んだ可能性があることも指摘している。

以上，18 世紀のドイツで出版されたヒュームの著作の独訳の中で，特に重要なものを紹介した。これらの訳の中でも，カントの理論哲学に特にかかわりが深いのは，1755 年版の『人間知

[22] Warda の『イマヌエル・カントの蔵書』からは，Schreiter 訳の『対話』のタイトルを見つけることができる。Vgl. Warda, A., a. a. O., S. 50. なお，Warda の著作については注 18 を参照のこと。

性研究』の独訳，『人間本性論』1.4.7 のハーマン訳，『自然宗教に関する対話』のハーマン訳の三つである[23]。もちろん，カントの実践哲学に対するヒュームの影響を考察する際には，ヒュームの『道徳原理研究』などの独訳の出版状況を調べる必要があるが，これに関しては別稿で論じる必要があるだろう。

まとめと展望

以上のように，ヴォルフ学派の哲学や 18 世紀ドイツにおけるヒューム受容に関する研究は，急速に発展を見せている。そして，これらの研究は，カントの批判哲学の哲学史的背景を新たな角度から考察することを可能にすると思われる。それは以下の理由による。カントの自我論や因果論の中には，ヴォルフやその信奉者の議論を批判するための議論がある。だが，従来の研究では，これらの議論の仮想敵がロックやヒュームであると誤解されることが少なくなかった。その一因としては，これまでヴォルフ学派の哲学がそれほど取り上げられなかったことが挙げられる。それゆえ，ヴォルフ学派の哲学とカントの哲学を比較検討することは，カントの批判哲学の哲学史的背景をより正確に解明するために寄与できる。以下では，こうした研究方法の事例を二つ示すことで本稿の記述を締めくくりたい。

まず，カントの人格の同一性に関する議論の歴史的研究に関して。これまで，ヒュームの人格の同一性に関する議論とカントの自我論を比較することで，いわゆる「ヒュームに対するカントの応答」の内実を論じる研究があった[24]。確かに，自我を実体とみなさない限りで，カントとヒュームの議論には親近性がある。それゆえ，両者の議論の共通点と相違点を明らかにすることは，問題史的な観点から見れば，重要な研究だろう。しかし，本稿で確認したように，カントはヒュームの人格の同一性に関する議論を知らなかった可能性が高い。それゆえ，カントの人格の同一性に関する議論の哲学史的源泉をヒュームに求めるのは難しいと思われる。

むしろ，カントは，自らの人格の同一性に関する議論をバウムガルテンの「合理的心理学」を批判するものと位置づけていた。「合理的心理学」のゴールの一つは，人間の魂の不死を証明

---

[23] ヒュームの『自然宗教に関する対話』からカントがどのような影響を受けたのかという問題については，以下の拙論で詳しく論じられている。増山浩人「デザイン論証と Als-Ob の方法 ── ヒュームの『自然宗教に関する対話』に対するカントの応答 ──」，『哲学』，64 号，日本哲学会編，知泉書館，2013 年，191 頁–205 頁。

[24] Cf. Ward, A., On Kant's Second Analogy and His Reply to Hume, in: *Kant-Studien*, 77, 1986, pp. 409–422. 同論文の 419 頁で，Ward は「カントの批判哲学が確固たるヒュームの懐疑論に応答しているのかを決するためには，第二類推論ではなく，いくつかのもっとも扱いにくい哲学的文書，つまり，カントの超越論的演繹と人格の同一性に関するヒュームの説明を集中的に論じる必要があるだろう」と述べている。

することである。そのために，バウムガルテンは二つの論法を用いている。一つ目の論法は，魂が単純実体であることから，魂の不死を証明する方法である（Vgl. Baumgarten, *Metaphysica*, §. 781）。二つ目の論法は，魂が判明な記憶を保持し続けることから魂の不死を証明する方法である。バウムガルテンは，こうした記憶を「人格性（personalitas）」と呼んでいた（Vgl. Baumgarten, *Metaphysica*, §. 641）。それゆえ，二つ目の論法は，人格の同一性に基づく証明と言うことができるだろう。

これらの論法を批判したのが，『純粋理性批判』の「誤謬推理論」である。確かに，「誤謬推理論」では，バウムガルテンの名は挙げられていない。しかし，カントの一連の形而上学講義の「合理的心理学」において，「誤謬推理論」や『実践理性批判』の魂の不死の要請に関連する議論が見出される。それゆえ，バウムガルテンの「合理的心理学」に対するカントの評価を知ることは，カントの人格の同一性や魂の不死に対する問題の哲学史的源泉を知るための大きな手がかりとなるだろう。

次に，『純粋理性批判』の「第二類推論」の因果論の歴史的背景に関して。従来，この箇所の因果論は，多くの場合，「ヒュームに対するカントの応答」として研究されてきた。確かに，「第二類推論」の因果論は，ヒュームの因果論に対する批判として側面もある。しかし，ヒュームは実体概念を虚構とみなしていた（Cf. Hume, *Treatise*, 1.1.6.2）。これに対し，カントは，実体概念を，「持続的なもの」という名称で，「経験の類推」全体の基礎においていた。実際，「経験の類推」の最終目的は，「第一類推論」の実体論と「第二類推論」の因果論の成果をふまえ，「第三類推論」で実体間の「相互性（Gemeinschaft）」の説明原理を提示することである。それゆえ，「第二類推論」を「ヒュームに対するカントの応答」としてのみ考察した場合，実体概念を前提とする「経験の類推」全体の哲学史的な位置づけを行うことが困難になってしまうのである。

むしろ，カントは「第二類推論」をヴォルフ学派の充足根拠律の証明を批判するための議論とみなしていた。ヴォルフやバウムガルテンは，与えられた帰結（ex. 出来事）の概念を分析することで，「何ものも根拠なしにはない（nihil est sine ratione）」という充足根拠律を証明しようとした（ex. Baumgarten, *Metaphysica*, §. 20）。だが，カントは，彼らの証明によって「あらゆる出来事がその原因を持つ」という原則を証明できないと考えていた。カントがたびたび充足根拠律の証明が徒労に終わったと述べているのはそのためである（Vgl. Kant, *KrdV*, B264f.; B811）。そして，彼らとは異なり，カントは，経験の可能性の条件という契機に着目することで，「あらゆる出来事はその原因を持つ」という原則の正当性を証明しようとした。『純粋理性批判』において，この課題が遂行されているのが「第二類推論」なのである[25]。

---

[25]「第二類推論」の因果論をヴォルフ学派に対する応答として位置づけられうることは，以下の拙論で示した。増山浩人「第二類推論と充足根拠律」，『日本カント研究 11　カントと幸福論』，日本カント協会編，理想社，2010 年，123–138 頁。

それに加え，「第二類推論」をヴォルフ学派の充足根拠律の証明を批判するための理論とみなした方が，「経験の類推」全体の狙いをよりよく解明することができる。ヴォルフ学派の哲学者にとって，充足根拠律は，実体間の相互性を予定調和説で説明するモナド論的な議論の基礎となっていた。この点を考慮した場合，「経験の類推」を，充足根拠律の意味を変容させることで，予定調和説とは異なる実体間の相互性の説明原理を提示する議論として位置づけることができる。そして，このように「経験の類推」をモナド論批判として位置づけることは，カントの実体論や個体論の哲学史的源泉を知るための重要な手がかりになるだろう。

（ますやま　ひろと・思想文化学専攻）